

江戸の漫画を楽しむ②

戯画浮世絵

江東区深川江戸資料館

江戸時代の漫画には、人々の暮らしや世情などが戯作的表現で描かれ、江戸庶民の人々に親しまれていました。漫画は、鳥羽絵などの版本や、のちに浮世絵のなかにも戯画の要素が取り入れられ、描かれるようになっていきます。

本号では、江戸の漫画が版本や浮世絵でどのように描かれたのか、北斎などの浮世絵師の作品を中心に、その種類と内容について取り上げます。

1. 北斎と漫画

「富嶽三十六景」などの風景画や花鳥画、美人画で知られる葛飾北斎（1760～1849）は、戯画を描いていた人物の一人です。主なシリーズに「鳥羽絵集会」などがあり、鳥羽絵本から影響を受けた作品があります。

北斎の代表作の一つである『北斎漫画』は、書名に「漫画」という言葉がありますが、現代の漫画（マンガ）やコミックの意味とは異なり、「漫筆」または「漫筆画」から、思いつくままに漫然と描いたことを意味しています。そこには、笑いを誘うような絵や、生活・風俗をユーモラスに描いている一方で、建物や動植物、自然の姿などを正確に描いている絵手本（スケッチ）という性格があります。なかには、戯画的な図も多く含まれており、人物の表情や動きに面白さを見出すことができます。とりわけ、『北斎漫画』12編（天保5・1834）は戯画としての要素が強く、権威（公家）・権力（武家階級）を風刺する戯画も多く描かれています。

また『北斎漫画』には、現代の漫画と同じような表現が使用されています。それは、現代の漫画のなかで「コマ表現（コマ割）」と呼ばれる、一つの頁を分割して話しを作りだしたり、斜線や曲線で仕切ってストーリーを展開させるものです。コマは仏教の教えを説く手段として古くから使われてきた表現です。『北



「人をばかにした人だ」歌川国芳
町田市立博物館蔵

斎漫画』では、分類や整理としてコマ枠が色々と使われており、多種多様なコマ表現をみることができます。なお、北斎は晩年、深川万年橋（江東区常盤1）辺りに住んでいたといわれています。

2. 戯画浮世絵

版本という形で庶民へ広がっていった漫画は、同時に多色刷りの見栄えのする戯画浮世絵としても発展していきます。鳥羽絵本に始まる簡略化された鳥羽絵スタイルの画は、様々な形でユーモアあふれる「遊び絵」として発展しました。

江戸における戯画といえば歌川国芳（1798～1861）が有名ですが、上図は、そのなかでも「寄せ絵」と呼ばれるもので、様々なポーズの人を寄せ集めて人の半身像を表現したシリーズの一つです。

上図は、あごをつき出して、人をばかにしたような顔の男性が額に貼られた紙片に息を吹きかけて飛ば

ず遊びをしている作品です。紙片は、絞りの手ぬぐいで表現されています。顔は裸の人々が集まって形づくられており、目は黒い椀、眉は黒い禿、髭は入れ墨で表現されています。胴体には、格子縞の着物の男たちが折り重なっています。詞書には「人の心はさまざまなものだ いろいろくろふしてよふよふ人一人にんまへになつた」（人の心は様々なものだ 色々苦労しようよう人一人前になつた）とあります。

このほかにも、絵で言葉を表現したなぞなぞの「判じ絵」や、主にこども向けに制作された「おもちゃ絵」等々の戯画浮世絵があります。

3. 深川が描かれた作品

「名所江戸百景」などの名所絵で知られている歌川ひろしげ 広重 (1797～1858) も戯画を手掛けています。広重の作品のなかには、影絵で人や物を描いた「即興かげぼし尽し 入ふね 茶わんちや台」や「即興かげぼし尽し うさぎ 鉢植の福寿草」などの作品があります。影絵とは、障子などに物や体を写してシルエットで形を描いたもので、宴席の余興などで楽しまれていました。

そして幕末になると、天保期以降の名所絵の流行を背景として、名所を舞台とした戯画が出されるようになります。

歌川広重の弟子であった歌川ひろかげ 広景は、名所を戯画で描いた人物の一人です。広景は、活動期間がわずか2年8か月で、広重の弟子であったということ以外はあまり知られていません。

幕末の江戸の名所を描いた「江戸名所道戯尽」は全50作で、広景の代表作といえます。その特色は、老若男女の江戸っ子たちが、江戸の名所を舞台に笑ったり騒いだりとユーモラスな姿で描かれています。なかには、師匠の広重の作品に似せて描いている作品や、葛飾北斎の作品を手本にしている作品があります。

「江戸名所道戯尽」のなかには、現在の江東区域の5か所の名所（「万年橋」「洲崎」「砂村疝気稲荷」「五百羅漢寺」「亀戸天神社」）が描かれています。

上図に描かれている「深川万年はし」（万年橋）は、小名木川の西側に架かる橋で、隅田川との合流地点の近くにありま



「江戸名所道戯尽 深川万年はし」歌川広景
万延元年（1860）江東区教育委員会 蔵

を望む勝景の地としても知られています。

そこには漁師たちが漁をしていて、川に沈めていた四ツ手網を引き上げたところ紐が切れてしまい、勢いあまって川に落ちてしまった様子が描かれています。その構図は、葛飾北斎の『富嶽百景』3編の「網裏の不二」を参考にして描かれています。

他にも、「江戸名所道戯尽 砂村せんき稲荷」は『北斎漫画』12編の人物たちを左右反転し、そっくりに描いていたり、「江戸名所道戯尽 五百羅漢さゝみ堂」では、歌川広重の「東都名所 五百羅漢さゝみ堂」に描かれた建造物や道を歩く人々の姿をそのまま模倣して描かれています。

このように江戸の漫画は、版本や浮世絵として描かれることで庶民をはじめ、多くの人に広く浸透していったといえます。

【主な参考文献】

『日本の滑稽絵—田河水泡氏寄贈コレクションを中心に—』（町田市立博物館 /1988）

清水勲『北斎漫画 日本マンガの原点』（平凡社 /2014）

太田記念美術館監修、日野原健司著『ヘンな浮世絵 歌川広景のお笑い江戸名所』（平凡社 /2017）